

シリーズ「グローバル・ジャスティス」
第40回「在日朝鮮人被爆者にとってのヒロシマ」
報告者：李実根（広島県原水禁常任理事）
(2013年12月5日)

シリーズ「グローバル・ジャスティス」第40回目は、「在日朝鮮人被爆者にとってのヒロシマ」と題されたご講演を李実根氏から賜った。

氏は、在日朝鮮人であり且つまた原爆被爆者として負うことになった、二重の被害者性、その被差別性について、実体験を基にありありと浮かび上がらせた。

1929年に山口県に在日朝鮮人二世として生を授かった氏は、まず、教育課程において差別を受けることになる。当時の進学校であった厚狭中学校へ1941年、必死の勉強によって入学を果たすも、戦争へと突き進む軍国主義時代の風潮と相まって、先生から民族差別に基づく言葉と身体への暴力を受け、二年たらずで中退することになる。

そして、氏は二年間ものあいだ、厚狭と神戸市三ノ宮を往来し、闇米の売買に携わることになる。そのなかで、1945年8月7日、三ノ宮からの帰宅途中、広島市で入市被爆する。当時の広島状況は、あたり一面焼け野原であり、地面には至るところに人間の溶解した無数の死体が足の踏み場も無いほど横たわっており、時折、その死体を踏み、それに足を滑らせながらなんとか広島を後にするも、直後から、発熱などの症状に見舞われた。

以上の経験が、つまり、いわれ無き民族差別と、いわれ無き被爆の「被害者性」が氏のその後の人生を方向付けることになる。

その後、朝連中央高等学院を卒業、共産党入党、朝連青年部での活動を経るも、1950年には反戦反米ビラ事件によって追われる身となり、1952年5月、密造酒の摘発の捜査により広島拘置所に拘留されることになる。1959年には釈放され、直後から広島の朝鮮総連での活動を開始し、1964年以降は商工会の仕事を引き受けることになるなど、活躍の幅を広げていく。

そこから、決定的な仕事を氏は成し遂げることになる。1975年8月、在日朝鮮人被爆者として初の被爆者団体である「広島県朝鮮人被爆者協議会」を結成し、会長の座に就く。ここに、氏の二重の被害者性がひとつの「政治」へと結実する。この活動において、例えば原爆被害者数の公式の記録の内には日本人のみが算出され、中国人や朝鮮人の被害者は除外されていることの不正義を訴え、また当初から認められてこなかった平和記念公園内の韓国人被爆者慰霊碑を建てるよう働きかけ、実現させた。ここには、日本人が通常教わる「被害者性」の位置の更に一歩外から歩みださざるを得ない困難な状況と、常に「政治」的たらざるを得ない切実な生を看取しうる。

事実、氏は公演中、何度も憤っておられた。さきの大戦における日本の加害者性を十分に自覚したうえであるが、「なぜ日本人はあれほどの被害を受けながら、アメリカに追随するのか」と。また幾度と無く「ノーモアヒロシマ」と唱えられた。オーソドックスな「日本人」の被害物語がイデオロギッシュに腹蔵させてきたもう一つの「ヒロシマ」。真に政治に翻弄されてきた主体によって紡ぎだされた「政治」の営みをそこに確かに認めることができる。

(文責：和田昌

也)